日本国憲法第九条（戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認）
①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
②前項の目的を達するため、陸空海軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

みやざき九条の会ニュース No.28
（封書版）2013年1月28日発行

〒880-0803宮崎市旭1-3-20くすの樹ビル
TEL:0985(24)8820　FAX:0985(22)2937
E-mail: miyazaki9jou@yahoo.co.jp
http://welove9.org/

新しい年を迎えて

今が九条の会の出番

藤原　宏志

＊　安倍内閣の再現

昨年末の総選挙で安倍内閣が再現しました。自民党は過半数の議席を取りましたが比例区得票率は28％、投票率が50％台だったことを考えると国民の15％ほどの支持で半分以上の議席を得たことになります。まさに小選挙区制度のマジックというほかありません。さすがのマスコミも「自民党が支持されたというよりも民主党の失政と小選挙区制の結果」と言わざるを得ませんでした。

安倍内閣は日銀に圧力をかけインフレ政策を推進しようとしています。バブルの崩壊により失敗が実証された市場経済至上主義をまたぞろ始めようとしています。株価が上がっても儲かるのは大株主だけで、物価が上がれば消費者の生活は苦しくなり貧富の格差が拡大することは明らかです。

＊九条改悪を公言する安倍内閣

消費税増税、ＴＴＰ（環太平洋経済連携協定）推進、原発再稼働、米軍基地機能拡大など時代に逆行する政策を公明、維新の会などの協力をえて強行しようとしています。

なかでも憲法九条を改悪し戦争ができる体制を作ろうとする、いわゆる「戦後レジュームからの脱却」論は極めて危険な思想です。安倍首相は以前から九条を改悪し自衛隊を軍隊に変え、「集団的自衛権」が行使できる体制にすると主張してきました。

これは海外派兵を可能にし、戦争への道を開く危険な策動です。尖閣諸島や竹島の領有権をめぐる挑発的な発言は領土問題の解決を遅らせるだけでなく、これを口実に軍備拡充を煽ろうとする前近代的な手法と言わざるをえません。

＊　外国メディアも安倍内閣に懸念

最近、右傾化が指摘される日本のメディアとは対蹠的に、外国の主要メディアから安倍内閣への批判的論調が出始めたのは注目されます。

アメリカのニューヨーク・タイムス紙がその社説で旧日本軍慰安婦問題に軍部が関与した事実を認めた旧河野官房長官談話について、これを安倍首相が見直すと表明したことを痛烈に批判しました。また、イギリスのエコノミスト紙は「安倍政権の真の性質は保守ではなく、過激な国粋主義である」と論評しています。フランスのル・モンド紙は「安倍政権のナショナリズムが北京と東京の対立する領土問題を激化させる」と警告しています。

＊　広範な国民運動の展開を

九条改悪の動きが加速度を増しつつある今日、九条の会の果たす役割は極めて大きい。安部内閣は手始めに憲法96条（改正の手続）について、改憲に必要な定数を各議院の2/3と決められている現条項を過半数に改悪しようとしている。九条改悪へのハードルを少しでも低くするためです。

九条の会は国のすみずみまで文字どうり草の根のように広がり、日本が二度と戦争を起こす国にならないよう憲法九条を堅持することを目指す集まりです。これは日本の平和を守るだけではなく、世界の平和に大きく貢献する道であると信じるからです。憲法は国会だけでは改正できません。改正には国会の2/3の賛成を得たのち国民投票で過半数の賛成を得なければなりません。今がその時、九条の会の出番です。まず身の回りから、いま一度、九条の値打ちを語りあいましょう。それが力です。

〈九条〉のゆくえと沖縄の現実

南　邦和

＊総選挙後の右傾化に思う

昨年末（12月16日）の“総選挙”は大方の予想どおりの結果であった。つまり、マニフェスト違反の与党民主党に対する制裁としての野党自民党の復権である。そして三年ぶりの自公連立による安倍内閣が発足した。この時点での海外メディアの反響は、日本の右傾化への危機感を伝え、韓国KBSの画像には、行進する自衛隊員たちの勇姿が登場している。

国内の報道でも「われら衆愚の選択」（週刊新潮）の見出しに見られるように、自嘲的な受け止め方が目立った。経済評論家の内橋克人氏は新年早々のNHKラジオで民主党排除の論理のみの選択肢からの選挙結果について「見るべきものを見ず」と表現し、憲法改正」「TPP」「原発」など、日本にとって目下の切実、深刻な課題が選挙争点から遠ざけられ、実体のない「第三極」の虚像に幻惑させられた選挙民の良識の劣化を嘆いた（勿論、メディアの責任も大きい）。

＊辺野古基地化反対の闘い

私は昨年11月ほぼ20年ぶりに沖縄旅行した。役所のOB会という気楽な目的の旅行であったが、その折に同行したかっての同僚夫妻と辺野古を訪れた（事前の連絡で案内してくれたのは地元の医療生協関係者であった）。この「辺野古」地名自体、すでに私の内部で風化しかかっている固有名詞であったが、そこで目撃したものは基地反対のための監視小屋に座り込み（この日126日目）を続けている人々の真剣な姿であった。

目の前に広がる〈美ら海（ちゅらうみ）〉（美しいサンゴ礁の海）が普天間飛行場の代替地に浮上して20年―大浦湾一帯のこのウルトラマリンの海面にV字形の滑走路を中心とする「新基地建設内配置計画」の青写真が描かれ日米両政府による手練手管の住民説得の謀議が練られてきている。この海域は“幻の怪獣”ジュゴンの生息地であり、キクメイシモドキ、クマノミ、マングローブなど希少動植物の宝庫である。

辺野古漁協前の座り込みテントの位置から大浦湾を望むと、沖縄の人々の基地建設反対に賭ける切実な願いがよくわかる（この日私たちはヘリ基地反対協議会の安次浩代表にもお会いした）。この「辺野古」をめぐる反基地闘争は96年の橋本首相とモンデール米国大使による「普天間飛行場全面返還の合意」以来、歴代政権による“県内”“県外”“国外”の政治的迷走を重ね、昨年末「環境アセス評価書」を強引にねじ込んでの「辺野古埋め立て申請」へと持ち込まれている。

辺野古の大浦湾

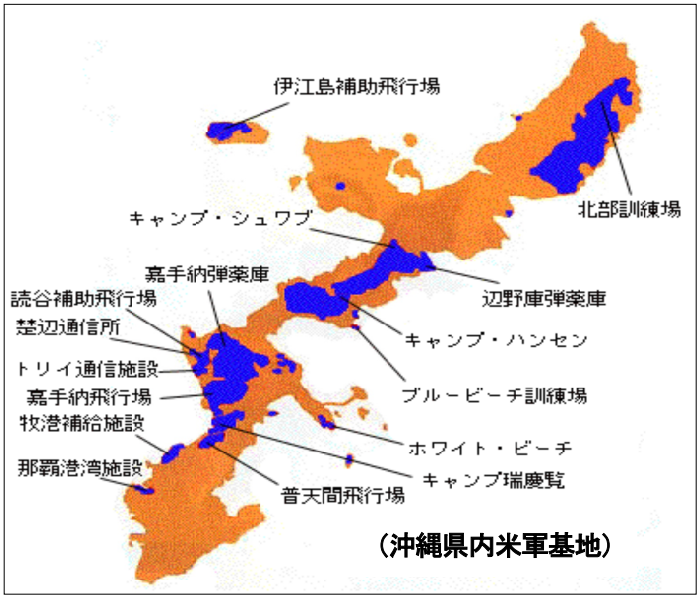
ジュゴン

沖縄の人々にとってこの反基地闘争は“魂の闘争”でもある。97年辺野古住民による〈命を守る会〉（ヘリポート建設阻止協議会）の結成以来、一貫して「命どう宝（ぬちどうたから）」の精神で全力を尽くしてきた闘争の歴史は尊い。その間「ジュゴン訴訟」（被告米国防長官、国防総省）があり、米国の意のままに責任回避に終始する粘り強い交渉の日々があった。そして忘れてはならないのは、すでにこの時点で、沖縄へのオスプレイ

配備計画が密かに進行していたことである。（99年ワシントンでの日米協議）

＊この目で見たオスプレイ

辺野古への道すがら那覇から名護市への高速道路に沿ってキャンプ瑞慶覧、キャンプハンセン、キャンプシュワブ・・・と米軍基地がひしめきあっている。地元の案内者はいくども米軍優遇の「思いやり予算」の不当性と沖縄県民のやり場のない憤りを語ってくれた。そしてこの日私ははじめて飛行中のオスプレイを見上げた。そのネーミングである「ミサゴ」の姿とは似つかぬ不吉な“怪鳥”を思わせるその機影と不気味な低周波をまき散らしての傍若無人の“飛行機体”であった。



（沖縄県内米軍基地）

現在、この沖縄には4万5千人の米軍が駐留しており、そのうち1万9千人があの悪名高い“海兵隊”である。この海兵隊員を中心とする米軍人らによる犯罪は年間150件に上る。95年に発生した米兵による少女暴行事件はまだ記憶に新しい。この時八万五千人参加の“県民総決起大会”が開かれ、沖縄の怒りが米軍基地に叩きつけられたが、米軍による蛮行は後を絶たない。

市街地を低空飛行する
オスプレイ

これらの犯罪は「日米地位協定」という超法規的治外法権的状況をつくり出している。日本政府はこの現実を直視しようとはしない。

米軍基地が日本にとって不可欠のものならば、“本土”を含めた47都道府県が平等にその負担を負うべき・・・というのが筋論である。そして13年新春幕開けのこの時期を選んで「辺野古が」再びクローズアップしてきている。政府から沖縄県知事への「辺野古埋め立て申請」の動きである。しかも、この政治判断は阿部総理の2月訪米のための手土産というのである。古い表現だがまさに「朝貢使」としてのアメリカ詣で以外のなにものでもない。

＊九条への態度決定が迫られる

今回の総選挙についてあるジャーナリストは、自民党にとって準決勝であり、目指す決勝戦は7月の参院選であると表現している。その時期が羊の仮面をはぎ狼に変身する時だと考えていい。「九条改正」は自民党にとって半世紀にわたる宿題でもある。TPP参加、原発再稼働とあわせて、アメリカ追従の「辺野古」基地化も推し進められることになるだろう。〈九条の会〉にとってもこれからがまさに“正念場”国民一人一人が「見るべきものを見る」良識的な視野に立ち「九条」について、「原発」について、勇気を持って発言し、行動するときだと思う。

２０１３・１・１５

手品じゃないよ、選挙は

瀬口　黎生

◇　にこやかにステージの中央にあらわれたマジシャンは、観衆を見回しながら、真新しい一〇〇〇円札を取り出し、ヒラヒラとさせ両面を見せたうえで、造作もなく折り畳んで破いていく。三二枚、六四枚とちぎり裂かれて掌に広がると、力一杯息を吹きかける。紙幣の屑は派手にステージに花吹雪として舞う。息をのむ観衆はマジシャンの手の上に現れた一万円札に目を奪われる。

◇　そのプロの鮮やかな手さばきに、拍手が送られる。正月の時間つぶしの演芸でよく観る光景だ。

◇　これを安心して観るのには暗黙の約束があるからである。・誰も損得がなく実害がないこと。・種や仕掛けがあることを分かったうえで、手さばきの見事さを観るのであって、騙されることは承知のうえであること。などである。要するに騙し合うことを愉しむのである。

◇　しかしこれが選挙や政治に関わる場面で出会わすと、そう簡単に見逃せない。民主党の行き詰まりで年末に行われた選挙の結果は酷いものであった。民主党の惨敗は誰もが予想していた。その他は予測を越え、見苦しい右往左往が繰り広げられた。

◇　しかし、自民の圧勝を誰が予測したであろうか。比例代表で三割の得票率もない政党が衆議院の六割を越える議席を持って右旋回している。まさに小選挙区制という見え見えの仕掛けに過ぎない。

◇　民意を代表しないことは歴然としている。公明や維新と手を結べば、解釈改憲だけでなく、国民の意思と関係なく、憲法改正の発議も可能となる。

◇　これらは死票の多さと共に、投票の意欲さえ奪ってしまい、議会制民主主義そのものの死さえ望遠できる。護憲勢力にとって、七月に予定されている参院選は、選挙制度の不備を咎めつつも、ゆるがせに出来ない正念場である。

【行事案内】

■第73回憲法と平和を考えるつどい

2月11日　10時～12時30分
宮崎市総合体育館大会議室
題目「21世紀第三の転換期における国民の選択」
講師「二宮厚美先生」神戸大学名誉教授（経済学）
会費　五百円
問合先　宮崎中央法律事務所　TEL（24）8820
主催　日本科学者会議ほか
“アベノミクス”で暮らしはよくなるか、聞く価値あり。

■ピースウオーク

つどい講演の終了後すぐに、「みやざき九条の会」主催によるピースウォークが行われますので、こちらもふるってご参加ください。コースは、会場を出たところから出発し、宮崎駅構内を抜けて、高千穂通り→山形屋交差点→若草通り→宮崎駅に戻り解散します。

■3・10原発いらない！宮崎いのちの広場

・日時　3月10日
・場所　宮崎中央公園
・10時～12時半　ステージ（歌、踊り、郷土芸能）
・13時～14時　集会
・14時～　デモ　2コースに分かれて、県庁まで

※今年は、昨年、参加しなかった「県労組会議」も加わることになり、二千名規模の“オール宮崎”を目指しています。

会費およびカンパのお願い

九条改憲の動き！　本会の活動、いよいよがんばりどき。会費・カンパよろしくお願いします。
郵便局振込先
口座記号・番号：0176-4-131244
加入者名：みやざき九条の会
年会費千円、及びカンパ（一口千円）も
◇ 同封の振り込み用紙をご利用ください